

国語教材としての「レキシントンの幽霊」

—他界を考える—

飯島 洋

Lexington Ghosts as teaching material

Hiroshi IJIMA

I

「レキシントンの幽霊」は「群像」一九九六年一〇月号に発表され、ほぼ倍の分量に加筆されて『レキシントンの幽霊』講談社、一九九六・一一に収載された。前者はショート・バージョン、後者はロング・バージョンと呼ばれている。ショート・バージョンのものが大修館書店と三省堂の高等学校現代文の教科書にコンスタントに掲載が続いており、「定番教材化される兆候」があるともいわれる(1)。

その一方で、実際の学校現場における扱いはどうかとなると、授業で取り上げられる機会は実は少ないようである。現職教員研修の機会に四名の高校教員に話を聞いたが、全員取り扱ったことがないということだった。どのように授業をしたらよいか迷うそだ。やはり、非現実的な作品世界を生徒に理解させることに困難を感じているものと思われる。本稿では、作中に現出する他界の持つ意味に焦点を当て、その解釈をとおして作品世界の全体像を明らかにしたい。

II

ケンブリッジに在住していた作家の「ぼく」は、知人の建築家ケイシーが仕事の都合で家を空け、同居人のジェレミーも不在となるため、その間の留守番を依頼される。承諾した「ぼく」はレキシントンにある彼の古い屋敷を訪ね、歴大なレコードコレクションが収められた音楽室でレコードを聴きながら仕事をする。ロング・バージョンでは、ケイシーはその部屋を、父の死後「神殿」が聖遺物安置所に対するように「手を付けずにいたらしく、「時間の流れの激みがちな家」のなかで、「しばらく前から時計がびたりと止まってしまっているみたい」に思われたという記述がある。夜十一時を過ぎ、「ぼく」は二階の寝室で眠りにつくが、一時過ぎに目を覚まし、自分が「空白の中に」いるのを意識する。「海岸の波の音のようなざわめき」に気づいた「ぼく」は、それが「ぼくを深い眠りからひきずりだしたのだ」と思う。

誰かが下にいると判断した「ぼく」は下に降り、居間でパーティーが開かれている様子を耳にする。そして音楽を聴いて談笑

している人々が現実の人間ではなく幽霊であると直感する。

この幽霊経験を、夢であるとする解釈はいくつかみられる。もっとも新しい論といえる引間史之の考察でも、犬の不在といった現実味を欠いた現象が、深夜の出来事が夢であったということ根拠づけると指摘する^(三)。夢であることは、一時過ぎに目を覚ましてから再び寝室に戻って眠りにつくまでの時間が、その前後の現実状況と食い違いを見せることに着目したものである。

十一時過ぎ、最初に就眠する時、「ぼく」は「パジャマに着替え、すぐに眠って」しまっていた。そして異変を感じ取って階下に降りる際、「パジャマを脱ぎ、床からズボンを拾い上げ」「Tシャツの上からセーターをかぶった」。そして声の主を幽霊たちであると確信して寝室に戻り、「部屋に帰ってベッドに潜り込」む。ロング・バージョンでは「部屋に帰ってそのままベッドに潜り込んだ」と加筆されている。ところが、九時前に起床した場面では、「パジャマ姿のまま階段を折り」たと描写される。これが幽霊経験の非現実性の論拠だが、「ぼく」はパジャマに関する食い違いを記述しながらも、その矛盾を自覚しない。語り手はすべての出来事が完了して時間を経た物語言説の場においても、その現実性を疑っていないのである。

この時空が現実であることは、複数の兆候によって主張される。目を覚まし、読書用のランプをつけた「ぼく」は、

床にこぼれた豆を集めるみたいに意識を一つ一つ拾い上げ、自分の体を現実になじませた。

これによって、自分が階下のざわめきによって眠りから覚めたことを認識している。現実感覚を回復することが、幽霊経験をもたらしたといっているのである。

また、一階の居間から漏れる人々の談笑や音楽を耳にして、中に入っていくべきかどうか躊躇している場面では、ズボンのポケットに入っていたクォーター硬貨を手にとって、回転させる。

その銀色のコインはぼくに、ソリッドな現実の感覚を思い出させてくれた。

と、この事態は述べられる。

こうして現実感覚を確認した直後、「ぼく」は「あれは幽霊なんだ」「談笑しているのは現実の人々ではないのだ」という判断に行き当たる。「ぼく」の経験が夢である可能性は、語りの現在においても全く想定されていない。

パジャマの記述に代表される、この経験の日常世界からの断絶と、「ぼく」がこの経験の現実性を繰り返し認識すること、「レキシントンの幽霊」はこの両者が成立するような世界を読者の前に開いている。それは「他界」と名指すことが可能であろう。幽霊経験の以前と以後に「ぼく」が身を置く現実とは異なるが、確実に「ぼく」が束の間生きた時空。このように幽霊が現れた場を捉えることで、そこをケイシーの父やケイシーの眠りと接続することが可能になると思われる。

ケイシーが帰宅して「ぼく」と再会したとき、「どう、留守のあいだかわったことはなかった？」と「玄関先でまずぼくに尋ねた」理由も、彼が自宅に他界が存在することを前提として、それが他者にも出現しうるかどうか、懸念とまではいかなくとも少し気にかかったと捉えれば納得のいく言動となる。

III

それから半年ほど二人は会うこともなかった。この期間にジェレミーは母親を亡くしてレキシントンを離れていることが紹介される。「最後にケイシーと会った」時、彼は「間違えるくらい老け込んで」おり、ジェレミーについて母を亡くしてから人が変わってしまった、星座の話しかしないと語る。そして、ケイシーの父とケイシー自身の永い眠りの経緯が語られる。

ケイシーの母が亡くなり、葬儀が終わった後、父は三週間眠り続けた。「石のように眠っていた」(ロング・バージョンでは「地中に埋められた石みたくに深く眠っていた」とケイシーは形容する。ロング・バージョンでは「おそらく夢さえ見ていなかったと思う」とも推測する。父は母のことを「おそらく息子のぼくよりも」深く愛していた。十五年まえ、彼の父が亡くなった。父の死んだ姿は「深く眠りこんでいた父そっくり」であり、既視感があった。悲しみはしたが驚きはあまりなかった。「父を愛していた」「精神的にも感情的にも深く父に結びついていた」彼は、「母が死んだ時に父がしたのと同じように」、二週間ほど「こんこんと眠り続けた」。

そのときには、眠りの世界がぼくにとつてのほんとうの世界で、現実の世界はむなしかりそのめの世界に過ぎなかった。それは色彩を欠いた浅薄な世界だった。そんなところで生きていたくなんかないとさえ思った。母が亡くなった時に父が感じていたことを、ぼくはようやく理解することができたというわけさ。ぼくの言っていることはわかるかな?つまりある種のものごとは、別の形をとるんだ。それは別の形をとらずにはいられないんだ。

「ある種のものごとは、別の形をとる」とはどういうことか、「レ

キシントンの幽霊」を論じる際に最も重要視される問題である。代表的な解釈としては、木股知史の次のものが挙げられる³³⁾。

ストーリーの流れのなかでは、近親者を喪った深い悲しみは、嗚咽や涙ではなく深い眠りという別のかたちをとって現れるということを示していると理解することができるだろう。

そのうえで木股はケイシーの語ったことを「ぼく」がケイシーの屋敷で幽霊に出会ったことと結びつけて換喩的な暗示として捉え、次のような解釈をとる。

「ぼく」が体験した幽霊は、ケイシーの内面が別のかたちをとって現れたものかもしれないということをも暗示しているのだ。

「精神的にも感情的に強く結びついていた」者を失った時、その痛みは「別のかたち」(「ここでは異様な「眠り」―擬似的な死)をとって現れる。」という馬場重行の見解³⁴⁾なども、木股論の前半とほぼ同様のものといえる。

一方坂田達紀は、「眠りの世界がぼくにとつての本当の世界で、現実の世界はむなしかりそのめの世界に過ぎなかった。それは色彩を欠いた浅薄な世界だった」というケイシーの発言に注目し、

〈死の世界〉ないしは〈あちら側の世界〉こそが「ほんとうの世界」(「ある種のものごと」)なのだが、それは「現実の世界」においては、「深く長い眠り」という「別のかたち」をとる(あるいは、とらざるを得ない)、と解釈できるのでないだろうか。

と述べている(五)。

改めて「レキシントンの幽霊」のテキストを検証してみよう。ケイシーは二週間にわたる眠りの経験を経て「眠りの世界」が「ほんとうの世界」で「現実の世界」は「かりそめの世界」であると認識する。父が感じていたであろうことを「ぼくはそこでようやく理解することができた」、すなわち「ある種のものごとは、別の形をとる」ことを悟ったというのである。

その父が母の死後眠っていたことについて、ロング・バージョンはケイシーは「夢さえ見ていなかったと思う」と考えていた。現在形で語られている以上、自分自身の経験を経た後に得た、あるいはそれ以前に感じていて経験後も維持されている感想である。父は夢を見ていたのではなく、眠りをおして「ほんとうの世界」にいたのだとケイシーは考えているのだ。父が感じていたことは、「ほんとうの世界」は日常的な現実世界とは別のところにある、それを経験するためには生きている人間としては「眠りの世界」に行くかたちをとるしかない、ということになる。ただ坂田の場合、眠りの世界に身を委ねたことを「夢を見ていた」と同義としている。意識が完全に失われているのであれば「そのときには」眠りの世界が「ほんとうの世界」だとケイシーがいう根拠がなくなってしまうというのである。

しかしここで、「ぼく」の幽霊経験に立ち戻ろう。パジャマや犬の記述だけに着目すれば、この経験は「ぼく」の夢だったという理解が成り立つ。しかし、「ぼく」はそれが確かな現実感覚を持つことを執拗に提示する。この世界を仮に他界としておいた。ケイシーの父やケイシーの長い眠りも、その期間夢を見ていたのではなく(外形上は夢を見ていたとされようが)、レキシントンの屋敷に存在する他界にいたのだといえるのではないか。このような

理解に立つことで、「ぼく」が味わった怪異譚とケイシーが語る眠りの物語という、全く別の挿話を、死者たちの領する世界に生者が足を踏み入れる経験として同一の地平に置くことが可能となる。「ぼく」が偶然垣間見ることになった他界に、ケイシーや彼の父は意志的に、現実世界を拒絶し「ほんとうの世界」として赴いたのだ。ケイシーが帰宅時に「まず」異変の有無を問うのは、彼自身のように「ほんとうの世界」を志向して眠りに赴くのではなく、も他界が現出し得る、そうしたレキシントンの屋敷の特質をこれまでの経験から察知していたのであろう。

これは数年前に実際に起こったことである。人物の名前だけは変えたけれど、それ以外は事実だ。

テキスト冒頭で語り手はこのような断りを入れる。木股は「ぼく」が作者村上春樹と重なるように描かれているとしたうえで、次のように指摘する(六)。

体験に根をもつように思わせるリアリティの作り方は、誰にも虚構と受け取られやすい幽霊譚という内容に錘をつけるような役割を果たしているように思われる。

この発想に従えば、冒頭の記述はテキストが虚構ではなく事実であると受け止めること、いわゆる不信の停止を要求するものとなる。確かに特にロング・バージョンの場合、「ぼく」がアメリカでも活動する作家であることが明示されており、村上の実体験であるかのように読まれる素地はある。しかし、これまでの分析を踏まえるならばむしろ、この物語を語り手の異常な夢の体験としてではなく、まさに語り手が現実として経験したと受け止める

ことを求めているといえよう。

IV

ケイシーと「ぼく」はレキシントンの屋敷の他界を経験した者同士である。しかし、ケイシーが返ってきたとき、「ぼく」は「その夜のできごとについては口にするまいと心に決め」、ケイシーの問いにも「特に何もなかったよ」と答える。ケイシーも、自らの眠りの物語を語り終えてから、「僕が今ここで死んでもだれも、ぼくのためにそんなに深く眠ってはくれない」と断言する。元同居人のジェレミーが母の死後星座の話しなくなっていたことについても「人が変わってしまったみたいだ」と捉え、ジェレミーを自分の理解可能な世界からは隔絶してしまっている存在とみなしている。ロング・バージョンではあからさまに、「初めから終わりまでろくでもない星座の話だ」と言っている。ジェレミーにとつての星座の話は、彼なりの他界と捉えることもできる。彼にとつてはそれこそが「ほんとうの世界」なのだ。しかしそれをケイシーは理解しようとはしない。

「レキシントンの幽霊」の登場人物はそれぞれ、形や深度は異なれ他界の経験を経ている。しかしそれは共有し、共感する可能性をあらかじめ奪われている。「ぼく」の経験はケイシーに語られ理解されることもなく、「これまでだれかにこの話をしたこと」もなかった。

考えてみればかなり奇妙な話であるはずなのに、その遠さのゆえに、僕にはそれがちつとも奇妙に思えないのだ。

他界が確かに存在したこと、そしてそれは誰にも共有されず語

られず、自分だけの記憶・記録 record (七) として蓄積されることによつて、現実性を担保されること、そのような事態が、「レキシントンの幽霊」には示されているといえよう。

注

- (一) 引間史之「教材としての村上春樹「レキシントンの幽霊」論―「ショート・バージョン」から読める「遠さ」に関して」(國學院大學大学院文学研究科論集) 四二号 二〇一五・三
- (二) 一に同じ。
- (三) 「レキシントンの幽霊」論―村上春樹の短編技法」(甲南大学紀要文学編) 一四八号 二〇〇七・三
- (四) 「新しい文学教育の地平」を拓くために―村上春樹「レキシントンの幽霊」を例として」(米沢国語国文) 三三三号 二〇一四・二
- (五) 「村上春樹の「レキシントンの幽霊」について」(四天王寺大学紀要) 六二号 二〇一六・一〇
- (六) 三に同じ。
- (七) 松本常彦「密輸のためのレッスン―「氷男」『レキシントンの幽霊』所収」(国文学 解釈と教材の研究) 一九九八・二二において、テクストに登場するレコードの意味が語義に遡及して考察されている。

付記 本稿は金沢大学連携ゼミナール研修(二〇一七・一〇・一九)における講義に基づく。